

特集 ゆるぎない英語力を育成するために

Projectはどのように変わったか

今井裕之 (関西大学)



Projectの特徴

24NCのプロジェクト型学習のページの呼称は、Mini-projectであった。28NCは“Mini”ではなくなったが、それには3つの改善の意が込められる。

割かれるページ数は同じで、年間3回の頻度も同じなので、Miniがとれたからといって活動規模が大きくなったわけではない。一番の違いはMini-projectがUSE、つまりLessonの一部であったのに対し、28NCでは、ProjectはLessonから独立している点である。これにより、当該Lessonの文法事項やトピックだけに縛られることがなくなり、各学期で学習した内容や技能(2,3レッスン分)を統合して行うことができる、言語活動のまとめのような位置づけになった。学期末に目標とする「Can-Do」を具体化した課題といえる。

違いの2点目は「考える(Think)」ステップを活動の手順の中に位置づけた点である。24NCのMini-projectは、現実に経験しそうなタスクを設定し、4技能を統合的に運用しながら、ペアやグループでの協働的な活動を取り入れつつ、段階的にタスクを進める構成になっている。その美点を継承しつつ、28NCではブレインストーミングのためのマッピングを加えるなど、話したり書いたりしたい内容を、

可視化して整理するThinkの過程を明確に位置づけた。思考を図示し、可視化することで、英語の知識・理解、技能練習に割く時間と同様に、思考・判断・表現するための時間の確保も大切な学習過程であることを学習者も意識できるよう心がけた。

3点目はUSEで行う言語活動との連携である。Projectを円滑に進めるためには、そのときだけ言語活動を活発化させようとしても難しい。当然ながら、普段からの継続的な取り組みが不可欠である。Projectで行う言語活動は、聞き取り、読み取り、やりとり、書き取り、Show & Tell、インタビュー、プレゼンテーションなど多様である。Projectが始まってからインタビューの方法を説明しては遅い。USE Read / Speak / Writeでこれらのタスク遂行能力を個別に鍛え、Projectでは、思考内容を重視しながら、より統合的に言語活動を実践する。例えば、Show & Tellの構成は、Opening / Body / Closingの3要素からなるが、この構成は、USE Speak / Writeで3年間、学年相応に課題を変えながらも、一貫して繰り返し登場している。思考・判断・表現に応用のきく基本パターンをUSEで育成し、Projectではより統合的な言語活動のなかで、思考のツール、表現技能として応用できることを目指している。

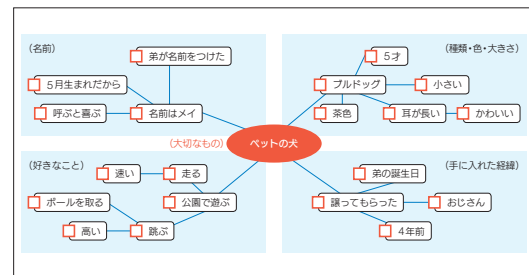


図1 マッピング図(Book 1 Project 3, 1 Listen)

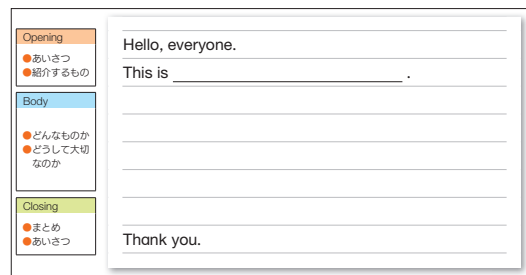


図2 Book 1 Project 3, 4 Write

プロジェクトの進行

活動の進行手順は、どのProjectでも4段階もしくは5段階で仕組まれており、各Projectで順序や内容は異なるが、Listen, Think, Speak, Read, Writeの活動が、現実社会で起こりそうなタスクになぞらえられて、統合的に配列されている(聞きながらメモを取る, など)。Book 1のProject 3「大切なものを紹介しよう」を例に展開を紹介したい。

① Listen

健が作成したブレインストーミングのためのマッピング図(図1参照)を見ながら彼のスピーチを聞く。計画段階のマッピングには、スピーチ内容以外のことも書かれており、その中からどの話題を選択し、関連づけてスピーチを組み立てたかを確認する。

② Think

自分の大切なものについてマッピングを行う。できるだけ短時間で発想を巡らせ、あれも言いたい、これも説明したいと表現欲求を育む時間である。この際、話すことを決めて原稿を書くのではなく「発想を広げること」を目標とする。

③ Speak (interaction)

マッピングを参照しながら、自分の大切なものについてパートナーとインタビューし合う。その際、「Idea Box」にある質問のしかた、会話パターンなどを参照しながら、大切にしているものの描写や説明を工夫し表現の幅を広げる。

④ Write

マッピングやインタビューの際のメモを見直ししながらShow & Tellの原稿を作成する。Opening / Body / Closingをガイドラインとして、全体構成を考えながら書けるように仕向ける。(図2参照)

⑤ Speak (presentation)

原稿のブラッシュアップ、修正、発表練習を経て、Show & Tellを行う。ペア/グループなど、聴衆を少数に限定する場合も、教室全体の前で発表する場合も、聴衆からの好意的反応が、発表者を育てるために不可欠である。「かろうじて原稿を読み切る」「儀礼的に拍手する」だけに終わらぬよう、発表者には、大切なものの写真を見せるなど表現の工夫を促し、聴衆には、That's cool! など短いコメントや

Uh-huh.などの相づちで、発表者を励まし、支え、讚えることを促す。最初は気恥ずかしいかもしれないが、聞き手が「日本人」のままでは、英語を話す気力も湧かない。何よりもまず聞き手が「英語話者」「好意的な聴衆」を演じることが、居心地よく発表者が表現したくなる空間をつくるために不可欠である。人前で話すことを生業にしている私たちは、聞き手の支えの大切さを日々実感しているはずである。

プロジェクトの「壁」を越えたい

プロジェクト型学習や、タスクベース学習と呼ばれる、現実社会の言語使用を念頭においた言語活動を実践しようとする時、

- ・時間が足りない。特に英語以外のことに割く時間や労力が無駄に感じる。
- ・評価が難しい。文法定着も確認しにくい。
- ・発表や会話がそもそも苦手な生徒たちのケアが難しい。

などの「壁」に直面することになる。今回の改訂で、時間効率が上がる工夫や、より自然で無理のない活動の流れづくり、USE Read / Speak / Writeとの連携強化などを試みたが、それでもなお、時間の壁、評価に値する学力がつくのかという教師の不安の壁、不慣れた外国語でのコミュニケーションへの生徒の不安の壁などは、実践の過程で生じることと思われる。

プロジェクトの「壁」の向こう側

プロジェクト型学習を導入・継続すると見えてくる生徒たちの成長と学力の確かさに驚くことがある。それは表現の豊かさであったり、即興的な対応であったり、心打たれる発表内容だったり、英語を通して他者や社会を知り、自分を表現できた実感からくる自信だったりもする。中でも「使いながら学ぶ」意義を感じるのには、文法も含めた表現の「正確さ」に加えて「適切さ(appropriateness)」である。例えば、主観的な理由を述べる時、I have three reasons! と言うのは不自然ではないが、客観的に理由を分析するなら、There are three reasons! と言ったほうが自然であることに、文脈の中で発話してみると気づくことができる。そんな学びの体験を生徒と共有するのも英語教師の醍醐味かと思う。

NEGISHI MASASHI
TAKAHASHI OSAMU
HIDAI SHIGEKI
MATSUZAWA SHINJI
SUZUKI SA TORU
KENO OSAMU
KUDO YOJI
IMAI HIROYUKI
SAKAI HIDEKI
TANABE YUJI
TAJIMA MISAKO